

---

# 夜はやって来る

天見酒

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夜はやって来る

### 【Nコード】

N0376L

### 【作者名】

天見酒

### 【あらすじ】

『貴方は科学的ではない不思議な現象に困っていませんか。悩まされていませんか。』

そんな方はフラット社へ

どんな相談でも乗ります。幽霊、妖怪の方も大歓迎』

もし、貴方がこんなポスターを町で見かけたのならフラット社へ行

った方が良いでしょう。

もうすぐ夜はやって来るでしょうから。

人と人ならざるモノの物語

## いつかの別れはやって来る

霧が静寂な夜を支配している。コンクリートの壁に挟まれた路地。白い視界に一定間隔で射し込む赤い光。

そして、白い霧に混じる紫煙。その煙が発生する元を見下ろす人。その後ろに控えている制服姿の人たち。

「やっと来たな。愛弟子」

腹に大きな穴が空いている人とは思えない台詞だった。そんなことを言いながらも煙草は口から離さないのは流石ヘビースモーカー。

「何で独りで行ったんですか？起こしてくださいよ」

もうこの人の前では泣かない。絶対に。だから、泣き声は出ていない筈だ。

3

「いやあ、余りにも可愛い寝顔だったから、起こすの可哀想だと思っただけさ」

「先生にそんな気遣いを受けたのは初めてですよ」

本当に適当なことをいう人だ。その人はおもむろに眼鏡を外す。

「これ…、やるよ」

大振りな腕の動きの割りに飛ばない眼鏡。地面に落ちるぎりぎりで手に収める。

「それ、卒業証書。ミエナイモノをミルための眼鏡。もうちょい、それで世界を見てみな…」

口から地に落ちた煙草。

この人の前では決して泣かなかった。自分の前に横たわるのは、もう聞くことも見ることも出来ないモノだから。

泣き叫ぶ。後ろで何か発している人たちの声が聞こえないように

都会を支配していた霧は、雨へと支配権を譲っていた。さっきまで煙を上げていた煙草は、寿命を全うすることなく役目を終えた。

## 愛した人は死んでもやって来る 1

西からの麗らかな春の日差し。眠気を払う為、暇に任せて煙草に火を付ける。

『副社長、私の近くで煙草を吸わないでください』

隣のワーキングデスクに座りパソコンを打っていた女性、姿は中学生に劣る少女から、何度も聞いたことのある声にならない声が、愛すべき喫煙者を苛める言葉の針を綴ってくる。

「いやあ、ケイちゃんの可愛らしく働く姿を眺めながら煙草を吸うのが俺の楽しみでさあ」

何度も読まされた標語に適当に言い返してやる。

『社長、今の発言はセクハラです』

予想以上の報復に慌てる俺。その文字列に誰もが認める三国一の美人女性が顔をあげる。ああ、相変わらずお美しい我が社長。もう一度言い直そう。

社長のこの場における絶対的な発言である。

「それじゃあ、シロ君の給料から好きなだけ慰謝料もらって良いよ」

社長は天使の微笑みで悪魔な宣告をする。

素早く首から下げた、ホワイトボードに思いの丈を書き込むわが社のお金を司るケイちゃん。

『副社長の今月の給料、17万、私は53万ですね』

社長の“良いよ”が部屋に響くと同時に本社のお金を全て管理する機械の箱へ入力を始める会計士。

副社長たる俺を脅すとは良い度胸だ。そっちがそういう態度を取るならばこっちにも覚悟がある。

「ごめんなさい。ワタクシに不適切な発言がありましたことを切に御詫びいたします！」

決まった！我ながら綺麗な土下座だ！

三十万は現実的かつ大きすぎます。  
プライド？そんなもので何を買えるというのです！

「ケイちゃん、シロ君も反省したみたいだから許してあげて？」

ああ、さすがは社長！神のごとき優しさ！

「後、十分経つたらね」

さすがは社長！悪魔のごとき優しさ。

「軽部勇一、只今帰りましたあゝ…シロウ、どうしたの？」

バッドタイミングに現れた男。全身黒い作業着。右胸とキャップにflatのロゴの入る服装。その男の後ろから入って来たカルが煩いと言わんばかりの顔をしたイケメン男児も俺の様子を見て疑問符を

黙って浮かべる。

「シロ君がケイちゃんにセクハラしたから謝罪中」  
いかにも機嫌良さそうに答える社長。社長、もしかして俺は何か貴女の気に障ることにしましたか？いつもの社長は俺にもっと優しいはずですよ。

「ナニいゝ！俺のケイちゃんにセクハラだとおゝ！シロウ、テメエゝ！なんて羨ましいことを！いや、違う！何故、俺に相談しなかった？これも違つて！俺のケイちゃんに俺の断りなく手を出すとは最低だぞ！」

カル、それも立派なセクハラだ。

「ケイちゃん、カル君の給料からも好きなだけ慰謝料取つて良いよ」

『この男からは本気で取りますよ』

結果、床にひれ伏す人間が増えました。

「遠慮しないで入りな。おい、客が来たぞ…、何してんだ、お前ら？」

カルやクロと同じ服装の中年男性が、おそらく女子高生だろう制服を着た女の子を連れて入ってくる。  
二人の視線は当然俺たちへ。

「セクハラに対する謝罪中です」

俺たちをケイちゃんの前にあるディスクに座り見下ろすクロが分かりやすく状況説明。



緊張しているだろうその女の子は、床に居る俺たちと目を合わせた  
ことでさらに身を強ばらせた。

愛した人は死んでもやって来る 1（後書き）

ご免なさい！

更新遅いです。なるべく早く更新するよう心掛けます。

そして、評価をくれた方、本当にありがとうございます！

## 愛した人は死んでもやって来る 2

依頼人に成人男性の悪いイメージを与えた事務室から場所を強制的に移して応接室へご案内。

この部屋に居るのは、我らが社長と会計事務にすら負ける権威無き副社長の俺とお茶を差し出す副社長より権威のある会計事務のケイ、お若き依頼人。そして、そびえ立つ一枚。

「お茶をどうぞ」

「アツ、ハイ…」

社長の勧めにより、慌てるようにお茶を啜る女の子。まあ、こんな得体の知れない事をやってる大人たちに囲まれたら緊張するだろう。

「それでまずはお名前聞いても言いかな？」

「吉田由子です。エツト、露花高校の一年生デス」  
ヨシダ・ユウコ

緊張ガチガチですな。

「私はこのフラット社の社長の平夏菜です。隣に居るのが一応副社  
タイラ・カナ  
長の真内士郎君で、お茶を運んでくれたのが小針経ちゃんね。  
コバリ・ケイ  
年上ばかりだけどあんまり緊張しなくても良いよ、敬語とかも気にし  
なくて良いからね」

社長がこれまた誰が見ても落ち着くような無邪気な笑みを浮かべる。

「アノ…。ごめんなさい。実はそんなにお金持ってなくて…、今、三千円しかお財布に入ってなくて」

彼女の必死な様子に申し訳ないが笑いがこぼれてしまった。

「大丈夫だって、高校生からばったくるほど食うに困ってねえよ。只で良いから話してみな。ここに来るからには、それなりに困ってるんだろ？」

まあ俺はなんて優しいんでしょう。

ありや、依頼人の目から涙が。えっ、俺ですか？俺の言い方に何か問題があつたのですか？

「どうすれば良いのか分かんなくて…、凄く怖くて…、でもこんなこと誰も信じないし…、それで街でポスター見かけて」

遂に顔を手の甲で拭い始める。まあ、言いたいことは何となく分かる。あのポスターが見えたってことはそれなりの事態に巻き込まれてる可能性も高い。

「そっか、怖かったんだね。辛かったよね。もう大丈夫だよ。お姉さんたちが何とかしてあげるからね」

依頼人の隣に移動した社長は依頼人の背を擦ってあげながら赤子をあやすような声音で語りかける。

「ゆっくりで良いから、話してくれるかな？」

社長に諭されてから暫くして、少女はしゃくりあげながらも、彼女

がミたことを語り出した。

三日前、彼女が付き合っていた彼氏の一回忌。学校を終えた彼女は彼の墓へと参った。なんて良い子なんだろう。既に彼の家族が昼に訪ねて居たようで磨かれた墓石に彼女は花を備えて帰ったそうだ。

その帰り道には既に日は暮れ始め、周囲は薄暗くなっていたそうだ。逢魔が時。朝の世界と夜の世界が重なる時。この世とあの世の交わる時。

その時、彼女は逢ってしまった。既にこの世のもので無くなった彼に。

### 愛した人は死んでもやって来る 3

彼女は語り続ける。話すのを止めるのすら恐怖しているように。

「はっ、始めは全然気付かなかったんです。暗い道だったから、誰か他の人かと思って、でも、後ろから段々とあの足音が近づいて来て、それで怖くなって走ったら、後ろも走って追って来て。後ろから私の名前を呼ばれて余計怖くなって」

名前を呼ばれた。

「返事を返したのか？」

「い、いえ、怖くて」

それが正しい。あの世の住人に下手に返事を返してはいけない。結び付きが強くなってしまう。

あれ、ケイちゃん何故睨むの？あのう由子ちゃん、お兄さんは全然怖い人じゃないからね。優しく質問したただけだからね。

「それで、その後はどうしたのかな？」

社長が由子ちゃんの背中を擦りながら続きを促す。

「家に逃げ込んだんです。そしたら、私の名前を呼びながら戸を叩く音が聞こえて、お母さんが帰って来るまでずっと。お母さんに言っても信じて貰えないし」

家に招き入れては無いようだな。

「それでその日は終わっただけで、昨日の帰り道にまた足音が聞

こえて来て、逃げたんだけど腕を掴まれて、振り向いたら彼の顔が合って、無理に振りほどいて逃げただけだ」

「ちょっと待って、腕を掴まれたんだな？」

俺の確認に彼女は首を縦に振る。それを見て社長の柳眉も曲がる。彼女に触れたと言うことは、こいつはもう只の霊では無い。ヤバい臭いがプンプンするぞ。これは簡単な案件では無くなったぞ。素早く片付け無ければ由子ちゃんが危険だ。その前に…。

「由子ちゃん、一つ確認するぞ。彼と会って話す覚悟はあるかい？これは彼と君を助けることになる」

強制する気は無い。でも、俺の欲しい答えは決まっている。彼に怯え泣く彼女には酷な答えだが。

「…どうすれば良いのか分かりません！でも、会って話します。話したいです。なんで…」

泣き出す彼女。中々の頑張りだな。

「社長、この件は俺とクロ、リュウさん、ケイちゃんで行きます。ケイちゃん、クロとリュウさんに伝えて」

頷いてケイちゃんが部屋を出て行くのを見て、社長が由子ちゃんの背中を擦りながら俺を見る。

「シロ君、気をつけてね」

気をつけるか。この人に言われると重みを感じてしまうな。

眼鏡を外して、ティッシュで拭きながら、応接室の窓を見た。薄緑色のブラインドの隙間からは、橙色な西陽が射し込んでいる。

逢魔が時。そして間もなく、夜がやって来る。



### 愛した人は死んでもやって来る 3（後書き）

久々な更新です。待たせて申し訳ないです。

これから週一、二は更新していきます。天見酒は書き出すと歯止めが利かなくなるので少しは更新が速くなります。

ご感想、ご指摘をお待ちしております。宜しければ、お願いします。

## 愛した人は死んでもやって来る 4

夜の露花公園。千メートル平方はある敷地の一角にある球技用グラウンドを勝手にお借りして、人避けの結界を張らして頂く。これで夜の公園を徘徊する不審者やラブラブカップル達を見ることはないだろう。

「あの、これ、本当に大丈夫なんですか？」

由子ちゃんが不安そうに自分の足元を指差す。土に拾った木の枝で描かれた直径五メートル位の円、その中央にでかでかと書かれた“結界”の文字。いやあ、いつもながらケイちゃんは達筆だ。

「ああ、その中に大丈夫。絶対に円の外に出ないでね」

由子ちゃんは僅かに胡散臭げに眉をしかめる。

「言葉にも文字にも意味があるんですよ。意味が生まれることは力が生まれることになります。言葉や文字を付けられることで存在意義ですら変容するんです」

ただ、立っているだけで様になるイケメン男、クロの説明癖が始まってしまう。玄人ですら分かりにくいと評判のクロの説明が素人に理解出来る筈が無い。算数の掛け算覚えたての小学生に、物理学のアインシュタインの相対性理論を語るようなもんだ。俺も相対性理論なんて理解出来ないけどね。

「要は、意味在るものには在るってことだ。深く考えても、こいつらみたいな頭でっかちな馬鹿になるだけだ」

おお、流石、リュウさん。いつもながら渋い表情で、布で包んだ自分の背を越す長物を杖代わりに煙草を吸いながらも、分かり易く纏めて下さる。由子ちゃんも少しは納得して下さったようで。つまりは俺とクロは同等の頭でっかち馬鹿と言うことですか？それは心外だ！

まあ、俺も煙草を一本吸わせて貰おう。うん、それが良い。内ポケットから取り出したボックスの中の一本に手を伸ばす。やっぱり止めた。リュウさんがまだ半分しか消えてない煙草を地面に捨てて、足で火を踏み消す。リュウさん、良い年してポイ捨ては止めなされ。いくら俺たちの待ち焦がれたヒトが現れたからと言って……。

「あれが由子ちゃんの彼氏かな？」

「いえ、あつ、はい。ソツ、そうだと思います。でも……」

歯切れが悪いお答えで。まあ、仕方がないな。このグラントを照らすスポットライトが、作り出す光と闇の境界線を越える青年。ゆっくりと近付いて来る陽炎のように揺らぐ人影。その顔は、生前は中々の好青年だった事を窺わせるも、怒りに燃えている目や口元に、頭には左右大きさの違う角、口から異様に伸びた犬歯が見えます。

俺の目算よりも、事態は悪化。あれは“オニ”だ。人だった悪霊の行き着くところ。

「由子、何で逃げるんだ。何で逃げるんだよ」

「ああ、まあ、あれだ。ゆっくりお話でもしませんかね、彼氏君」

「由子、何でこんなに好きなのに」

俺達は眼中に無いようで。愛は盲目ってやつかな、重い想いがそこに在る。ふざけてる場合じゃないんだけどね。

ブツブツと呟きながら、近付いて来るオニ。オニが出てくるんだったら、社長はとにかくカルぐらいいは連れて来るべきだったかな。

「荒療治になるなあ。リュウさん、あいつ押さえ付けられる？その間に俺が閉じ込めるわ」

「年寄りに力仕事を任せるな」

リュウさんはそう言いながらも、自前の武器、矛を包む布を剥ぐ。やる気あるじゃない。

「クロ、先鋒を頼む。ケイちゃん、適当に支援してやってくれ」

三つの短き棒をねじり付けた棒を既に構えるクロに確認。

「あゝ、また確認するけど、由子ちゃん。君は絶対にそこから出ないこと」

震えながらも頷くのを確認。俺も手に持つ俺の片腕程の長さしかない愛刀に力が入る。

「……それじゃあ、GOだ！」

言った途端に飛び出すクロ。直ぐに相手との距離が詰まり、首を目

掛けて、斜め上から振り下ろす。

かってえな。クロの棒を用いた打撃は結構重いぜ。怯みもしやしない。クロが直ぐに棒を引く力を遠心力に変えて、第二撃を脇腹へ。今度は効いた。

横滑りに倒れるオニ。直ぐに方膝を立てて上げた顔にクロの突きがささる。生身の人間ならば首の骨が折れる強打突。でも、こいつは首の骨なんて概念は、とづくに無くしてるけどね。だから、クロの突きを受けても蛙の面に水。しかし、クロを先鋒に出した甲斐はあった。

立ち上がり、クロへ拳を振り上げるオニさん。ようやく、俺たちを彼の恋路を阻む忌々しい奴等と見てくれた。さすがに由子ちゃんを餌のままはいけない。鈍い音で空気を震わす腕。クロの回避は至極当然の判断。人の恋路を邪魔する奴は馬に蹴られて死んでしまえと言うが、オニに殴られたら確実に死ぬる。そういう事例もあるからね……。

クロが相手の攻撃を自分に集める為に付かず離れずの距離で豪腕を交わす中に、ケイちゃんがクロの後ろにしゃがみ込む。クロがそれを確認して、ケイちゃんの後ろへと軽快なワンステップ。ケイちゃんが手に持ったメモ帳の切れ端を地面に押し付ける。地面に現れる膝元ぐらいの深さの穴。バランスを崩すオニに突っ込むリュウさん。オニの腹を深く突き通す。そのまま押し倒し、地面にオニを串刺しに。由子ちゃんから僅かな悲鳴。ちょい、健全な少女に見せるもんじゃないよね。でも、手を抜ける相手じゃないんだよね。

地面に矛で張り付けにされたオニが矛の柄を両腕で掴み引き抜こうとする。リュウさんは、それを押さえ付けているが、矛は上へと押され始める。

「シロウ！もたねえぞ！早くしろ！」

タイミング良くこちら準備は整いました。傍観者に徹するのは一時休止。俺もオニに向かって迅速に動こう。

俺が動き出し、リュウさんが素早く矛を抜いて下がる。リュウさんが空けた席に俺の愛刀を突き刺す。

その愛刀の刺さるオニを中心に俺のチカラで地面に描き出すは、バランス良く五本の直線で形成された星形図形とその頂点を結ぶ円。オニの力は弱まり、暴れようとしめない。

オニさんが動けなくなったところで、一仕事終了かな。少し由子ちゃんに働いてもらって、俺は煙草休憩に入りますかねえ。

#### 愛した人は死んでもやって来る 4（後書き）

この小説は伝承などを天見酒フィルターで解釈した作品でございます。

設定上おかしいところは多々あると思いますが、皆様、生暖かい目で見守ってやって下さい。

## 愛した人は死んでもやって来る 5

腹に俺の愛刀が刺さり、ぐったりと五芒星の上に横たわるオニ、いや、オニだった者。

「邪気も抜けて、少しは落ち着いたか？」

煙草を口から外して尋ねると首を動かし口を動かす幽霊君。

「ご迷惑を掛けました。すいません」

由子ちゃん同様に礼儀正しいね。関心だ。

「僕はルール違反ですよ。これからどうなるんですか？」

夜空を眺めながらそう聞いてくる。

「そいつは俺の知ることでも、決められることでも無いな。閻魔様に聞きな。そこまでの道は開いてやるよ」

「それでは、お願いします」

これまた素直だね。もう少し足掻いて貰いたい気もするけど。まあ、そう急くことも無いでしょう。

「十分間だけやる。彼女と御別れしろよ。また、こっちに帰って来ないように未練を全て棄てて置いてけよ」

由子ちゃんを残しその場を離れる俺達。幽霊君が許しを乞う涙声が



聞こえた。

何を謝っているのだろうか。こっちに帰って来たこと、彼女を怖がらせたこと、それとも死んでしまったことか。まあ、俺には関係の無いことと割り切ろう。死んだ人間が何を思うか何て分かりようも無いしね。

十分後、彼は在るべき場所に帰った。ただただ泣き続ける由子ちゃん。俺達に掛ける言葉もあるはずなく、このまま公園で朝日を拝む訳にも行かず。

「クロ、ケイちゃん。由子ちゃんを家まで送ってあげて」

俺の指名した二人に促されて歩き出す由子ちゃん。少し冷たい対応だったかな？

「由子ちゃん。さっき、リュウさんが意味が在るから存在し、存在するから意味があるって言ったよな？」

泣き顔で振り返り、頷く少女。

「今、ここに彼は存在していた。それがどんな意味があるのか。良く考えてあげな」

まあ俺って、人生の後輩に助言を与える良い大人ですね。

お節介かも知れないが言わずにいれなかったのが本音だけだね。由子ちゃんよりも、俺がセンチメンタルなんだ。

三人の背中が闇に消えたところで、リュウさんが煙草の灰を落とし

ながら口を開く。

「それで、お前はあのオニが存在した意味をどう捉えるんだ？」

鋭いことで、先手を盗られた。それを聞くためにリュウさんと残ってデートしてるのに。

「おかしいよね。悪霊がこんなに早くオニに成るなんてね。リュウさんの見立ては？」

眼を細めながら、流し眼を送る中年男性。社長とかにやられたドキドキするんだけどなあ。

「あの幽霊の恋人への想いがとても強かった」

オニになるには十年かそこらは負の想いが必要。その説だったら愛って偉大だね。

「それか、他の強い邪気に曝されたか…だな」

俺もそっちの説を指示するね、オニさんが急に現れたら。

そして、確信はないが俺とリュウさんが同時に想い描いているだろうアイツの顔。アイツが関わってる可能性。

これはこれはとても面白いことになりそうだ。愉快的狂乱の幕開けかな。

## 愛した人は死んでもやって来る 5（後書き）

やっとこさ、一話が終了しました。

次回、本作品のメイン主人公が登場いたします。やっと出てきますよ。

えっ、シロウがメイン主人公じゃないの？違いますよ。まだメイン主人公は出てきて無いもん。

天見酒の書く、迷走する迷作『夜はやって来る』これから御応援よろしく願います！

## 黒猫とその人はやって来る 1

日曜日。朝の六時半に家を出る。

休日も学校に行くななんて、と普通は思うのだろうけど、私にしてみれば、一日を自宅で過ごすことほど気の休まない時は無い。まだ学校で部活をやっていた方がマシなんだ。

自転車を漕いで、いつもの道で見かける休日の関係無いいつものヒトたち。

垣根の前で一日中朝顔を眺めているお婆さん。ガードレール前に立っている血塗れ片足の少女。最近になって良く出会う、首に生々しい縄の後を付けながらも毎日通勤しているサラリーマンさん。

目新しいことは何も無い。今日も何事も無い平凡な一日だ。私にとってはだけど。

でも、今日は違った。とても大きく違った。

今日から私は非常識の玄関から、非常識の住人に引き込まれて行く。夜の世界へ。

自転車で十分、電車で十分、露花駅。後は十分歩いて露花高校。少しは気分良く目的地に着けると思ってた。

駅の柱に貼ってあるいつもの一枚のポスターが私の目に止まる。黒い下地に白い文字。普通のポスターじゃないのは分かる。何か不思議な感じがするから。

私と同じにミえる人が居るかも？私の問題を何とかしてくれるかも。このフラットを訪ねてみようか何度も迷い、何度も私の引っ込み思案な性格が勝っている。

私の頭に突然、強い衝撃が走る。

「なぐに、見てんのかなぐ、幽霊女」

竹刀袋で肩を叩きながら嫌な笑みを浮かべる男。本当に嫌な奴に会ってしまった。

「何、幽霊でも見えてんのか？幽霊とお話し中かなぐ？」

いつもの嫌味。言い返したところで意味は無い。というのは、言い訳。悔しくてしょうがない。私は言い返す勇気が無いだけなんだ。

黙って堪えている私に、気分を良くした先輩は、私なんか居なかった者にして去って行く。恐らく、今日の部活の前に、あの先輩から駅の柱の前で何かを見ていた靈感後輩の話が面白可笑しく語られる事だろう。

少し部活に出たく無くなって来たけど、サボったら余計何を言われるか分かったものじゃない。家には帰りたくない。

行くしかない。どっちみちこれが私の日常だ。気味悪がられ、蔑まれる。もう覚悟…、諦めは着いた。

そんな私の日常は先生によって変えられていく。

黒猫とその人はやって来る 1（後書き）

ハイ、女の子を主人公にしてみました。

書けるのか？天見酒よ？いや、書くのだ！天見酒よ！

更新遅くてすいません！頑張って早めに更新をします。

## 黒猫とその人はやって来る 2

気付いた時には既に西日が射している剣道場の裏手にある石階段。鍵を閉めに来た用務員のおじさんが一人で雑巾をかけている私に声を掛けてくれなかったら、時間の無常な経過に気付かなかった。

まだ、二年間時間を見ること以外ほとんど使われていない携帯時計となつている電話は16:30をディスプレイに表示している。唯一、親以外で登録されていて、何回かメールのやり取りをした事のある先輩に、始めてこちらからメールを送るかどうかが悩んでしまう。

今日、風邪を引いて休んでしまった先輩。お見舞いにメールを送るぐらいに、いや、私にとつてはそれ以上にお世話になつている。だから、今ここでメールをする事が何だか四季先輩に、私が今日の事を告げ口したい気持ちが見えるようで嫌なんだ。

四季先輩を心配する気持ちも確かなんだけど、先輩のメルアドを前に指は動かさず、結局、食べ頃を過ぎた弁当の包みを開く事にする。こうやって、一人で食べるのは、いつもの事。クラスメートが学校に居ない休日の部活には、四季先輩がつまらない話題しか持っていない後輩にわざわざ付き合ってくれるけど。家に帰ったら、やっぱり勇気を出して、早く元気になつてくださいのメールぐらいは送るべきだ。

ニヤア〜と私の隣で高い声が一つ。私の隣にちよこんと背筋を伸ばし礼儀正しく座つて、つまらない私の顔を見上げる黒猫。

「えっと、分け前が欲しいのかな？猫ちゃん？」

気分がかなり良くなった私は手のひらに一欠片の卵焼き乗せて差し出す。美味しそうに食べてくれる猫。可愛い。オレンジな光に照らされる綺麗な黒い毛並み、そして、金色に光る優しい眼。私は心が和やかになり、撫でたいと言う欲求が出てくる。私はこの可愛らしい不法侵入なお相伴者がとても嬉しかった。その猫の後ろで静かに降られるもう一本の尻尾がミえて少し警戒心が生まれるまで。

「えっと、猫さんは化け猫さんですか？」

敬語になって通じるかも分からない人間語で話し掛ける。

「やはり、お嬢さんにはミえているようだね」

黒猫は首を曲げて自分の尾を見た後に、フリフリと愛らしく二本の尻尾を振りながら、人間語を話す。

「残念ながら、我輩は化け猫では無い」

私のミエル体質上少しだけ勉強した知識からの推理は外れたようだ。しかし、猫が我輩って…。

「我輩は猫又である。名前は…」

「まだ無い、の？」

化け猫と猫又の微妙な違いが分からない事はさておき、私のある有名小説の有名な序文に続く台詞に、首を降る猫。

「親しき人達からランポと呼ばれている」



これまた、文豪の名前。黒猫という事が理由ならば、エドガーとか、アランとか、ポーとかにするべきじゃないのだろうか？

「お嬢さんの名前を聞いてもよろしいかな？」

そう言つて私の顔を覗き込んでくる猫又さん。家族で唯一私と同じ体質で、私に理解のあつたお婆ちゃんに教わつた事の一つ。『この世のものじゃない者に簡単に名前を教えちゃいけないよ。名前を教えたら取り付かれてしまうからね』

この猫又さんはとても紳士的な態度だけど、文字通り猫を被つた恐ろしい猫又かも知れない。しかし、相手は名乗つたのに、此方は名乗らないというのは失礼だから、少し迷つてしまふ。

「おつ！ランポ何やつてんだ？仕事サボつて女子高生を口説きやがつて」

物言いとは違い笑いながら近付いて来る見知らぬ男性。黒い帽子に黒いジャケットに黒いズボン。

「我輩は此方の不思議なお嬢さんと少しお話をしていただけだよ。お嬢さん、これは我輩に名前を付けた真打士郎という者だよ」

ランポさんに紹介された真打さん。服装を変えれば何処にでも居そうな眼鏡の二十代ぐらいのお兄さん。この人がビジネススーツを着れば、普通の新米サラリーマンに見えるし、工場の作業着を着れば、普通の工員に見える。私服を着ていけば、パチンコ屋に座つて居ても可笑しく無いし、鉛筆を耳に挟んで競馬場を競馬新聞を持ちながら彷徨いて居ても違和感が無さそう。若いようで、おじさん臭そうな感じの人だ。

失礼するよと私の隣にランポさんを挟んで座って、慣れた手付きで煙草を吸い出す仕草とか。校内全面禁煙と言う規則を教えるべきだろうか？

「確かに不思議なお嬢さんだ。君はミえるの？」

眼鏡の奥に輝く優しそうな瞳。ランポさんが居る今、私よりも不思議なこの人に嘘をついても仕方がない。ランポさんと普通に話す様子から、この人もミえる人なのだろうと思えば、戸惑いも薄れる。

「そうか。名前、聞いて良い？」

遠慮がちに頷いたと取られただろう私は、ランポさんに聞かれた時と同じ迷いを感じる。でも、この人は私に危害を加えようとはしないだろう。不思議な気配を感じるけど、生きてる人間だろうし。

「セガワ・ナナ  
瀬川七です」

「ナナちゃんね？」

久しぶりの自己紹介に、煙を吐きながら笑う真打さん。しかし、真打さんの眼鏡の奥の優しそうな眼は直ぐに険しい物に変わる。

「ナナちゃん、悪いんだけど、今日はそのお弁当はしまって早く家に帰った方が良い。この学校は今ちびつと、いや、大分危ないから」

真打さんの忠告。この学校が危険？どういう事だろうか？

「なるべく急いだ方が良くも知れない」

固まってしまった私を急かす、眼が怖い真打さん。頭では理解出来ないものの、その声に慌てて食べ掛けのお弁当を片付け始める。

そんなやつと動き始めた私を襲った急激な全身に鳥肌が覆うような寒気。真打さんから、舌打ちが聞こえる。ランポさんから、私の心配する声も。

でも、私の心の中を巡る言い知れない感情。会ったばかりなのに、良い人だと思えるこの一人と良い猫又だと思える一匹。

その人達を私の横に立て掛けている竹刀袋に収まっている竹刀で思いつ切り叩きたい。叩き殺してしまいたい。そんな私に在らざる感情が染み込んできた。

## 黒猫とその人はやって来る 2（後書き）

当小説は、某偉大なる文豪達とは何ら関係は在りません。

愚作者が某偉大なる推理小説家が大好きなだけです。

そのペンネームは某アメリカの小説家から拝借したという説も在りますが、先生曰く、江戸川付近を酔っ払って千鳥足で歩いている時に思い付いたそうで。

どこぞの駄目小説家見習いと違って、なんとも風流で、味のあるペンネームじゃ在りませんか？

### 黒猫とその人はやって来る 3

「おーい、大丈夫かあ？」

その声と顔に掛かる煙に我に帰る私。顔の近くにある煙草と眼鏡と瞳。そして、竹刀の入った私の竹刀袋を力強く抑える腕。私がその竹刀袋に、部活で鍛えた両腕で、かなりの力を込めて入るのに、その人の片手はぴくりとも動かない。そう冷静に分析できるほど、私は正気に戻っていた。

「ごめんなさい！」

私は何をしてしまったんだ。会ったばかりの人に殴り掛かるなんて！この人じゃなければ怪我をしていたかも知れない。そんな私を優しい眼で見ている真打さん。その別段怒っていない表情に、余計、穴が合ったら入りたくなってしまう。

「ナナ君。具合は大丈夫かい？我輩が一応、周囲の瘴気は抜って措置したのだが……」

ランポさんに言われて気付く寒気と倦怠感。でも、今は羞恥心の方が勝ってる。

「はい、大丈夫です。すいません」

頭を下げたら、もう上げられない。このまま、土下座をしてしまいたいぐらい。

「まあ、今はそんな事をしてられないから言うぞ。ランポから離れ

るな。オツケイ？だあー、リュウさんとカルも連れて来るんだつた  
ー

真打さんからの愚痴混じりの指示に頷くと、真打さんがグランドの方へ駆けていく。

「あつ、ちよつとナナ君。我輩達はここで、待ってしようつて」

少し興味がある。少しだけじゃないから、真打さんの指示通りにランポさんと離れないように片手に抱え、竹刀を持ったまま駆け出したのだけど。

真打さんには直ぐに追い付けた。剣道場の正面、グランドに入った所で、女性の人と止まっていたから。グランドに溢れる異形な者達を眺めていたから。

「駄目だね。携帯通じないよ。完璧に私たち閉じ込められちゃたね？正に壺の中に放り込まれたムシだね」

場違いにもおつとりと笑っている女性。凄く綺麗だと思う。服装は真打さんと同じ黒づくしの作業着で色気の無い物だけど、整った目鼻に風にそよぐ長い黒髪。

そんな美女と真打さんの後ろに広がるのは、地獄絵図。鬼らしきものも居れば、蛇らしきものも居る。その姿からは何か判別出来ず、ただ生きて無いという事が分かるだけのもの。それらが一応になつて殴り合い、噛み付き合い、身体が千切れても構わず、咆哮しながら殺しあっている光景。普通の人より色んなものを見て来た私でもこんなおぞましいものは見た事がない。

ランポさんがさつき、瘴気を抜ったと言った。私の曖昧なオカルト

知識では、瘴気は地獄に満ちる空気。人の理性を狂わせる。それが今、この場に溢れて居ると言うことなのだろうか？

「ありゃ、人避けの陣を張っておいた筈なんだけどな？」

「あつ、隠れてろつて、言つてなかった…よな」

女性が私を見つけ、真打さんが私を捉えて眉をしかめる。

「あの、今何が起きてるんですか？」

言い訳がましく、腰の位置に居たランポさんを少し上に抱え上げ、約束を守っている事をアピールしてから真打さんに訊ねる。

「中々、強かな子だ」

笑いながら皮肉を言う真打さん。

「ここを片付けたら、話してやるから絶対に動くなよ。社長、この場を任せます」

そう言い、手を横に伸ばす真打さん。その手の先から消えて行く。再び現れる手と握られている長弓。それを社長と呼ばれた女の人に渡す。

「エー、丸投げですか？まあ、良いけどね」

その真打さんの所業に眼を見張っていた私の心を穏やかにするような笑顔を向けながら、弓を受け取る女性。私に背を向け、綺麗に姿勢を正し、弓の弦を引く。顔から笑みは消え、その集中している姿に矢は使わないのと聞ける状態ではない。

静かに優美に弓を引いている女性。その女性の身体から白い湯気のようなものが溢れ出すのを見たような気がした。

一瞬後、響いた弦の音。 たったの一音。 長大に壮嚴に。

その弦音で感じていた寒気が去り、心地好い暖かさを感じる。

瘴気に取り付かれ、無我夢中に狂声を上げて戦っていた魑魅魍魎達は静かに地に沈む。

太陽の僅かな残り火は消える。 夜はやって来た。



黒猫とその人はやって来る 3（後書き）

まだ一話、二話続きます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0376l/>

---

夜はやって来る

2010年10月13日07時53分発行